

近江ARS再開の辞

染め替えて近江大事の師走の集い

九月六日の集まりを致し方なく延期して、お上の要請に応じたなんて松岡らしくなかったなと少し悔やんでいたのですが、染め替えて十二月三日にみなさんを琵琶湖畔の一隅にお呼びできることになり、あらためて嬉しい気分になります。

近江ARSという動向は兆してきたばかりのもの、中山事務所の中山さん、三井寺の福家さん、石山寺の鷲尾さん、叶匠壽庵の芝田さん、大津市歴史博物館の横谷さんなど、ごく少数の声に私が応じたところから始まったものです。この兆しは私がこれまで体験してきたものなかで、格別に澄んでいました。そこで、できるかぎりの思いを注いでみようと決めました。

なぜなのか。巨きな琵琶湖の風情、近江京に始まった何かの負性、山王ヒエが抱えた靈性のような力、蟬丸伝説の不思議、寂室元光が永源寺にこめたもの、菅浦のコミュニティ、十一面観音の道、竹や糸への思い、堅田の一休の覚悟、信長の途方もない安土城の構想、大津絵の諧謔、芭蕉が幻住庵あたりに葬ってほしいと託した気持ち、近江八景のイメージフォーマット、近江上布の透き通るような柔らかさ、フェノロサや天心と三井寺のかかわり、そして父が長浜に生まれ育ったことなどかかはたらいているのだろうと思います。

すでに隈研吾さんとは一帯に点と線と面をつなぐプランをおこそう、田中優子さんには「連」を遊んでもらおう、本條秀太郎さんとは三味線による近江つれづれ節をつくっていかう、遠州流の小堀宗実さんとは茶事のネットワークを準備しようなどと相談しています。

十二月三日のびわ湖ホールでは殊更の趣向を用意するわけではありませんが、福家さんの長吏就任を祝しつつ、銘々それぞれの「近江大事」を交わしたいと思っています。ぜひともお越しく下さい。よほどのことがないかぎり延期いたしません。